



三人の兄弟を天に送る

横山 良樹

石の柱の巻頭言で教会員の追悼がつづく。教会の年齢構成を考えれば無理からぬことと思

いつつも三月の同じ週に川口正さんと田口靖章さんを、五月に入って石原忠さんを天に送り、御国の近しさを覚える昨今を過ごしている。神さまが川口正さんに与えられた地上の命は八三年、田口靖章さんは九二年、石原忠さんは八五年であった。現在、日本の男性の平均寿命は八一・〇九歳だそうだから、いずれも平均寿命以上を与えられたことになる。しかし健康年齢などを考えれば、そう単純に比較できるものではない。特に川口さんと田口さんは最後の数年間は教会の礼拝に出席することが叶わなかった。石原さんは昨年十二月の礼拝出席が最後であった。忠実な教会生活を過ごしてこれらの方々が健康年齢を失ったのち、教会に通えなくなつてからの信仰のサポートが牧会者であるわたしに問われたと思う。コロナの時期を挟んだために病院や施設の訪問が難しく、自宅の訪問にも気を遣わねばならない時であったことを加味しても十分だったとは言い難く、神さまに申し訳なく思う。今回は召された順に、兄

弟たちを思い起こし、その信仰のあり様を留めたい。

川口正さんと田口靖章さんの訃報は連続して入った。月曜に川口さんが召され、木曜に行われる葬儀の準備をしていたところ水曜に靖章さんの訃報が入ったため、いきおい二人をならべて観想することになった。わたしが川口さんと田口さんをならべて思うことは「天の故郷」、あるいは「天の故郷の消息」という共通している。

川口正さんは長野県蕪崎市の生まれで、故郷の原風景について「たまに田舎に帰ると富士が南に、八ヶ岳が北に見える。ほっとする。静寂のなかにいると日頃雑用に追われている日々から解放される。子どもの頃よく夏には兄弟で、富士山が覆いかぶさるように見える川端を歩いた。夜になると月見草が一面に開く道だった」と書いておられる。愛唱讃美歌が日本人の作詞作曲による「山路越えて」だったのも頷ける。信州大学卒業後は愛知に就職されたが、故郷への憧憬が正さんに深く刻まれていた。英語教師として県内の高校で教えられ、受験指導に力を発揮し、多くの生徒に慕われ、また教員仲間から信頼を置かれていた方であった。穂積圭吾・多美恵さんのお座敷教会時代から生え抜きであった坂林美智子さんと一九六九年に結婚されたこともあって、穂積家の歴史に興味をもたれ、手記を残しておられたと聞く。下駄を履いて教会に来られたり、古き良き時代のパンカラを思わせる方であった。退職後は辞書の編纂に

携わられるほど優れた能力を生かして、名古屋外語大学の講師に迎えられるなどして活躍されたが、六八歳の時に、のちに乾癬と診断される正体不明の皮膚疾患との闘いが始まった。長期にわたって外出も困難になるほどの状態でご夫妻共に苦しまれる時期を過ごされた。正さんの場合、いわゆる自由に活動できた健康年齢は突然打ち切られてしまった。また新型コロナウイルスの時期に傍らにあって常に正さんを支え続けた美智子さんを先に天に送ったことは痛恨事であったろう。寛解までおよそ十五年を要したこの病との戦いで正さんは「山辺に向かいて我目を上ぐ、助けは問わずかたより来たるか」という思いを重ねる日々を過ごされた。正さんの愛唱聖句はローマの信徒への手紙の「それどころか苦難をも誇りとします。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を産むということ」をわたしたちは知っています。希望はわたしたちを欺くことはありません。聖霊によってわたしたちの心に神の愛が注がれているからです」であったが、この聖書の伝える消息に身を添わせ、祈りを戦いの道具として過ごされていた。信仰を内面的な拠り所とし、自分の置かれた状況の向こう側にあるものによって支えられる体験、わたしたちの外なる人は日々衰えてゆくが、内なる人は日々新しくされてゆくと、祈りの戦いを、晩年の正さんは主から課題として与えられ、それに向き合われた生涯をすごされた。そのなかで故郷の原風景と御国を慕う思いが重なっていったように感じている。

田口靖章さんの故郷は岐阜県加茂郡佐見村

である。半田教会がもう六十年以上にわたって夏期学校に使用させていただいている懐かしい場所、山間のしずかな集落である。父寅雄さんの仕事の関係で七歳のとき半田に移られた。小学三年生のときに小兒麻痺に罹患して長期欠席を余儀なくされた。太平洋戦争たけなわの時代で、多くの子どもたちが小国民として戦争にからめとられていくなか、病によってこのムーブメントから離れた場所におかれたことが靖章さんの内省的な観察者としての特質を育てたのではないかと思う。人格形成期が戦争と病の時期と重なっていたために生きることの意味、死の意味、自分の立ち位置といったことを常に考える患慮深さを身に着けてゆかれた。お母様の導きもあつてキリスト教信仰と出会い、二十歳の時に受洗した。人よりも十年ほど遅れて社会に出られたが医療関係の働きによく用いられた。教会でも役員を長くつとめ、信仰の立場から数々の知見を述べ、教会形成に寄与された。教会に残された文章をみると、見張り塔の上に立つて、いま教会の為すべきことは何か。神さまから問われていることは何かを教員にむけて発信し続けた人と思う。一文を紹介したい。「神に聴いて生きること、これがキリスト者として第一にとるべき態度だろうと思います。しかし現実の自分は本当に聴く姿勢があるのか、そう気づいてハツとすることがあります。聴く姿勢とは何でしょうか。自分以外の存在を素直に認め、新鮮な驚きをもって見つめることではないでしょうか」と語っておられる。三三歳

の時の文章だが、このとおり神に聴いて生きることを習い性としておられた姿をわたしも目撃している。鶴舞の名大病院に入院されたときのことだ。その聖書箇所を選んだことについて言葉を交わすことになった。その時の様子がとても印象的で、おしゃべりな方ではないがスイッチが入ると鋭く切り込んでこられる。目を天井に向けてじつと考え込み、言葉を返される。そのときわたしは、ああ、田口さんはリーダーのような方だと感銘を受けた。語られた御言葉を受けての信仰の応答、手術を受ける自分のいまの状況において、牧師が取り次いだこの聖句は自分に何を御心として伝えるのか、適切な応答を計測するような姿勢は生涯かわることがなかった。病床においてもじつと黙って御国との距離を測っているような方だったと思う。

五月に召された石原忠さんは先のふたりが移住者であったのに対し、成岩生まれの成岩育ち、生涯、半田から離れることがなかった。戦後日本の高度経済成長期に敏腕サラリーマンとして証券分野で活躍された。キリスト教との接点はCBCラジオ放送「キリストへの時間」のリスナーだったことで、感想を送ったところ、当時、「キリストへの時間」協力委員をしていた篠田潔牧師からハガキが届き、中村町の穂積宅でのお座敷教会に出席。これが半田教会とつながるきっかけとなった。二四歳のとき篠田牧師より受洗、教員となり。無類の子ども好きで教員の子

弟で、石原さんに遊んでもらわなかった子はいなかった。交通公園のゴーカートや、電車好きの子どものために河和線を太田川駅まで往復していたというエピソードもある。定年後も地域の小学生の見守りボランティアを十年ほど続けられた。三十歳で役員になり、以後は七十歳を超えるまで半田教会をけん引してきたお一人だった。一九八〇年代の西館建築に藤條聡一郎さんと共に尽力し、一九九〇年代の知多南伝道においては中心的役割を担われ、知多奥田キリスト教センター建築委員会の委員長もつとめられた。わたし自身、奥田伝道に携わって献身の志を与えられたこともあり、今回の三人のなかでは石原さんといちばん密にやりあつたと思う。自分の意見を曲げずに主張される方だったので、それを教会の筋道・信仰の理ことわりに落とし込むにはどうしたらよいかを訓練させられた。率直で歯に衣着せぬが、明るく、あとに引きずらない方であつたのは助かった。信仰においては純なところをお持ちの方で「わたしを祝福してください。ださなければ離しません」と神の使いにしがみついたヤコブのような信仰をお持ちだった。七八歳まで毎年続けられた感話を読むと、神さまにその時々の願いをぶつけ、答えを待ち、思い巡らし、また祈ることを繰り返しておられる。最後の訪問の時、ベッドに横たわつたまま、わたしが祈り終わると両手をあわせてすーっと高く上げられた姿が忘れられない。教員が三名減じ、天に三人を増した。御国は近い。

川口正兄追悼

「二人旅」私にとつての父



川口 格

なんやかんやと父とは二人旅をすることが多々あった。しかも行先は父が決める、まあ半田にいた頃の私は、働いてる訳ではないのでしようがない。ドイツ・ニーランドが出来たといつても連れて行ってくれる訳もなく、覚えている限り、つくば科学博に連れていかれただけな気がする。

さて旅先を父が決めているとは言つても、行先について父が調べている訳でもなく、行き当たりばったりな旅が進められて行くことになる。

二人とも歩くことを苦にしないと言うかうろろうと何か見ながら進むのが好きなので、旅は基本歩くことになる。しかし何か調べている訳では無いため、初めての京都旅では駅に向かつて歩いているが、なんかこつちの道が気になる。適当に歩くので、碁盤の目の京都で東から駅を通り過ぎて西側に行つてしまふ罪の擦り付けをし、奈良では何かこつちにいるのではと一時間くらい山道を歩き、ぐるっとまわつても何も無いなど、そんなことが多々あり、家に帰ってきてそんな話をする。母になんでタクシーを使わないと二人して怒られる、私としてはお金を持つてるのは父だけなのでなぜ私までと思うところもあつ

た。二人とも基本自分のことしか考えないで旅をするので、旅中はほとんど話さない。周りの旅行者はどう見ても親子だという姿の二人が無言で歩いているのは、「なぜ？」と不気味に思われていたことであろう。二人としては楽しんで旅行をしていただけなのだ。

「焼き芋が食べたい」と父が買ったがいいが一本は食べられないと半分にし食べ、それしか食べなかつたりとか、帰宅時に大雪になつてしまい歩いて帰るが、雁宿の手すりの上、雪をとつて転がしていたらなんとなく、そのまま自宅まで転がし、雪だるまを作つてしまつたりなど、私にとつての父は、めんどくさい、なにしているんだろうという様な人であった。まあ嫌いではなかつたが。

川口夫妻の思い出

伊藤 敦

半田教会の礼拝の司会を川口先生が、オルガンストは奥様の美智子様のご奉仕するご様子を今も思い出されます。私も受洗後司会を、オルガンストの妻と共にご奉仕出来たことを懐かしく思い出しています。これも神様のお導きによるものと受け止めています。

ところで、川口先生とは同じ高校職員として教職にありましたが、共に女子バレーボール部の監督、それも素人監督として活動していた当時を忘れることが出来ません。純粋な生徒たちとの交流の思い出ははずれ先生と語り合う時が来るまでお預けにしましょう。

百周年記念誌編集からの回想

榊原 いずみ

川口兄は半田教会百周年記念誌制作の編集長でした。当時私は同じ委員として、奥さんの美智子姉も含めてお宅に伺つたり行き来をしました。訥弁とは違ふけれど、思うところを唐突に語りだしたりする川口さんは、歴史作家の司馬遼太郎なら「かれの感情と知性はぶあつい自製の肉に覆われ、そこからは窺いにくく」とでも表現しそうな感じでした。わたしは記念誌編集のために初めてパソコンを購入し、川口さんの分担した知多奥田キリスト教センターの歴史など、同兄の手書き原稿をワードで起こしました。おおざっぱにみえて凝り性な川口さんは、原稿以外にも「こんな文書がみつかった」「当時のこんな写真があった」とナマの資料をどこからかもってくる。私は原稿未満な資料のあつかいに困りましたが、川口さんは記念誌に使えるかより、資料の発掘そのものが好きだったようです。またもののルーツを意識のいく人であることが印象的でした。「半田教会の成り立ち」は「穂積長老の出身係累は」ということが川口さんのおもだった興味の対象で「出自」（貴賤という意味でなく）というものに価値を見出しているようでした。英語の先生らしくギッシングの「ヘンリー・ライクロフトの私記」がいい、と教えてくれました。作中主人公の独白で記される、自己に対する肯定と批判がともども掛け値なしに誠実な珠玉の傑作です。

田口靖章兄追悼

信仰の先達



田口 徹

今こうして父のことを思いめぐらすと、趣味の園芸のほかに、何が楽しみで生きてきたのだろうか。私が言うのもなんだが、教会に行くことが彼の使命だったような気がする。

父は佐見から亀崎に引越してきて、小学校三年までは学校に行ったが、その後体調不良、不登校、大人になって夜間中学を卒業。

穂積さんの信徒の集まりに参加するようになって神様に会ったようだ。父はその経緯を私には全く語らなかったが：

私が幼いころから我が家では、毎朝、聖書の箇所を一章輪読して、祈りをしてから朝食を食べるのが日課であった。私が反抗期になってもそれは続いた。また、教会学校の説教の前日は、聖書辞典やコンコルダンス、リビングバイブルなどを持ち込んで書齋に夜遅くまでこもって原稿を作っていたことを思い出す。私はそんな父の姿に、親しみは持てなかった。だが、あるとき私が悪い行いをして多くの人に迷惑をかけた。父は静かにどう思うんだと言った。私は素直に「ごめんなさい」と言うと、思いっきり抱きしめてくれた。まるで放蕩息子が帰ってきたのを喜ぶ父親のようだった。私にとって父とは、信仰とはどうゆうものか体現してくれた存在であった。だ

から私にとって、信仰者として、父というよりもは先達であると感じている。

み国の春 作詞 作曲 田口靖章

いざ 共に いざ 共に
みくにの春を うたえはや
みづ 共に みづ 共に
みくにの春を うたえはや

右の楽譜は作詞作曲、田口靖章さんです。葬儀式で特別賛美として田口恵実姉歌唱指導、徹兄ギター演奏されました。

靖章兄の思い出

篠田 顕

私が初めて田口靖章さんに会ったのは、半田教会が穂積長老のお宅を借りてお座敷礼拝をしている頃である。当時は教会学校が終わった後の大人の礼拝中、子供達は穂積さん宅にある中庭で、子供だけで遊んでいた。さてこの写真は、その中庭で靖章さんが私と妹の二人を抱えて撮って下さったスリーショットである。記録には一九六二年四月とあるので、当時の靖章さんは三十歳、私は七歳であ



る。そのころ靖章さんはカメラに凝っていて、四角い箱型で上から覗いて撮る一眼レフをいつも持ち歩いていて、機会があれば写真を撮っておられた。この写真は、そのカメラを使って誰かに撮影を依頼して撮ったものだと思います。その後の私と靖章さんの関係は、私が成人して夏期学校の準備の為に佐見と一緒に行った頃から再スタートする。当時は佐見の田口邸に一泊して帰ってくるのだが、晩ご飯の時に靖章さんから広間の床を指さして、「私はこのあたりで生まれました」と聞かされ、ビックリした覚えがある。また半田での宣教活動は亀崎から始まった等、興味深い話を聞かされどのあたりなのかを聞いて、私はその場所を一度訪ねて行った事がある。このように靖章兄は、私に様々な情報提供して下さったり、教会員としての生き方を教えて頂いた。その靖章兄も、今はもう天国で安らかに暮らしておられる事でしょう。栄光在天、ハレルヤ。

石原忠兄追悼

教会の皆様へ感謝



石原みさ子

神様のお守りのうちに石原忠は八五年の人生を終えて天に帰りました。ほんの最近まで家の中には夫が使っていた介護ベット、車イス、玄関の手すりなども今はありません、むなしさと悲しみが込みあげます。夫は八五歳まで生かされたことを感謝していました。

私たちは神様の導きのままにこの世を生かされているのですから全てを受け入れたらと思っています。夫の人生は何事にも一生懸命でした。教会生活に於いても、会社の仕事に於いても、そして家族に於いても一生懸命に愛した人でした。仕事をリタイヤしてからは、近くの小学校の子供達の安全見守りのボランティアをしたり、散歩したり、静かな生活を楽しんでおりました。そんな生活の中で、体調を崩して療養生活が始まり、この度のお別れの日を迎えることになりました。その日の朝私は夫の傍らにいました。夫は私の顔をじっと見ていました。夫に「今朝はいい顔をしてるねえ」と話したり、孫の話をしている間に静かに、静かに夫は天に召されていきました。葬儀のあと「お父さんは神様に愛された人だったんだね」と息子がポツリと言いました。その言葉が私の心に深くしみました。感謝の涙があふれました。教会の皆様、親しく接して下さった方々、お祈りして

下さった方々、長い間お世話になりました。ありがとうございました。

石原さんを想う

神原光意

急なお別れに言葉がまとまりませんが、最後と思えば・・・

奥田集会についても車で一緒に、いろいろ話しました。センターでは木村綾子さん、佐久間輝子さんがにこやかに迎えてくれました。集会后木村さんが「簡保の宿」に誘ってくれ、三人で昼から湯につかり、食事を囲みました。ちよつとした旅行気分の集会は石原さんのおかげでした。篠田牧師が「まきば」にいたころ藍田さんが石原さんと私を乗せて「まきば」までドライブしました。「まきば」の受付の人が我々三人を見ると「今日はどこへおでかけですか」と声をかけてきたものでした。先生を入れた四人の昼ごはんは藍田さんのリードで、食べることを忘れるくらい話に花が咲きました。帰りは大府で藍田さんおすすめのおうどん店に寄り、石原さんはうどんと具を購入、帰宅後奥田の福祉大生の下宿に届けていました。息子さんが福岡の大学在学中、福岡南教会の人に親切にもらった、ととても喜んでいたことがあり、同じことをしようとしたのかも、と想像したものです。穂積さん宅の教会、会堂建築、奥田センター開設、一緒に駆け抜けてきました。長い信仰生活、親しく交わってもらい感謝しています。篠田先生はじめ、なつかしい教友たちと天国でゆつくりして、あとに続く自分を待っていてください。

感謝を込めて

藤條淳子

石原忠兄の印象は、教会のことで聡一郎さんといつも議論を戦わせていて難しい方だと思っていました。ところが、子どもが教会学校に行く頃になると、大人の礼拝までの間お散歩に連れ出してくれ、誰の子どもも負け隔てなく声掛けされていて、子ども達から慕われていました。その様子は娘たちよりお伝えします。

「小さい頃から教会に行くと、いつも優しく名前を呼んで下さいました。大人になっても変わらないその温かな思いやりが、心の支えになっていました。寂しさは尽きませんが、頂いた優しさを忘れずに感謝しています。」（聡美）

「石原さんの「おい、久しぶりだな。元気が？」という明るい声かけに、「元気ですよ！」とお返事するのがお会いした時のお決まりでした。今、こつやつて大人になって振り返ると、あの優しさと明るさは、きつと沢山の心に残っているのだらうと思います。」（聡恵）

「小さい頃から教会内外で家族のように私の成長を見守ってくれた石原さん。小学校の頃には通学路で、教会では一番声を掛けてくれ、誕生日には菓やカードに聖句を添えて贈ってくれました。私が幼少期に贈った手作りの栞を聖書に挟み、大切に伝えてくれた、毎回その度に温かい気持ちになりました。家族のように愛情を注いでくれて感謝です。」（聡杏）

葬儀のお孫さんのお話がとても愛情深く素敵でした。石原さんに出会った子どもは愛を石原さん

を通して降り注がれたように思います。

この場をお借りして川口正兄にもごどもより感謝を込めて。

「小さい頃の私たちには川口さんの身長がとっても高く見え、真顔の顔が少し怖かった。でも、当時教会学校に通うみんなの共通認識はでんぐり返しのオジサン。毎週代わるがわるででんぐり返しをしてもらい、川口さんの周りには、でんぐり返し待ちの子どもたちが集まっていました。得意な子どもたちに、怖がりの私もだんだん笑顔になり、川口さんの周りには笑顔があふれていました。でんぐり返しを卒業した後も顔を見れば、元気が？と話しかけてくれて愛のある方でした。」

教会には子どもたちの家族のように見守る石原忠さん川口正さん、遠くから笑顔で見ている田口靖章さん戸田安土さんがいてくださったことに感謝です。ありがとうございました。

私と讃美歌 ③⑨

桜井洋志

教会に通うようになってから四年、そして洗礼を受けてから一年半、教会で多くの讃美歌を歌うようになりました。しかし讃美歌の多くは、私が慣れ親しんできたロックやポップスとは違ったメロディー展開をするため、音程を外してしまうことがしばしばあります。そのため、失敗が目立たないように、つい声を小さくして歌ってしまうこともあります。

そんな私にとって、讃美歌「主の食卓を囲み」は曲が親しみやすく、初めて聴いた時から歌い

やすいと感じました。自信を持って、声を出して歌える曲の一つです。そしてこの曲の中で繰り返される「マラナ・タ」という聞き慣れない言葉について調べたところ、アラム語で「主よ、来て下さい」という意味であることを知りました。この「マラナ・タ」を「主よ、来て下さい」に読み替えてみると、この讃美歌が祈りの言葉を捧げる際の一つのテンプレートのように感じられました。

私はまだ、自分の言葉で自然に祈ることが、苦手です。祈禱会では前もって祈る内容を準備していますが、それでよいのかどうか自信を持っていません。しかし、讃美歌を歌うことによって、そこにこめられた信仰の思いや言葉を借りて、自分の信仰の心を神様に向ける祈りを捧げられていることに気づきました。自分ではうまく言葉にできない祈りの思いも、讃美歌を通して神様に届けることができるのです。私にとって讃美歌は祈りを手助けしてくれる存在なのだと感じていきます。

ところで教会では歌われませんが、私にはそれ以外にも心に残る、大好きな讃美歌があります。それは映画「天使にラブソングを」で歌われた「Hail Holy Queen」やその続編で歌われた「Oh Happy Day」などです。これらはゴスペルに分類されますが、広い意味で神様を讃美する歌なので好きな讃美歌として挙げたいと思います。私はこれらの映画が好きなので、最近ネット配信されていることに気づき、久しぶりに観返してみました。そして昔は気にしていなかった歌の意味を改めて

調べてみると、印象がだいぶ変わりました。特に「Oh Happy Day」は、以前は「楽しい曲」という程度の印象しか持っていませんでしたが、実は受洗した日を「罪の赦しと新しい人生の始まりの日」として心から喜んで歌うべきことを知り、今の自分たち夫婦の心情と重なるものがあり、非常に感銘を受けました。讃美歌には、自分の気持ちを代弁し、神様に届けてくれる役割があるのだと、改めて気づかされました。

このように、讃美歌は私たちの信仰や祈りに寄り添ってくれる存在であり、神様に向かう手助けをしてくれるのだと実感しています。これからも、讃美歌を通して少しずつ信仰を深めていきたいと願っています。

◆ 編集後記 ◆

今号は、三月に川口正兄、田口靖章兄、五月に石原忠兄の召天に伴い、ご家族始め教会員八人プラス三人からの追悼と「私と讃美歌」の寄稿を頂きました。有難うございます。

前号で追悼しました戸田安土兄と共に三人の方々は半田教会の使命の確立、土地取得、会堂及び西館建築、奥田キリスト教センター開設などその後の教会形成に役員として教会員の全幅の信頼得て、篠田牧師、横山両牧師を支え、この群れをリードして頂きました。四人がおられない事は大きく戸惑いますが、残された私達が信仰の継承を祈り、知多半島の宣教責任を果たしたいと願っています。(竹内)